

### 第3章 肉と結婚

#### 3-1. 肉と祭

森林が後退し、「昔のように狩猟でシャアやイノシシは獲れなくなった」。

筆者が、肉が家に持ち込まれるのを目にし、あるいは村人たちから「明日は肉があるから食事に来てくれ」と招待を受けるのは、大抵祭の日や結婚式の前後だった。

村人たちとバザールに行き、ビクラム歴 (bikramsambāt N.)<sup>1</sup>のカレンダーを購入すれば、そのなかに必ずその名が書かれている大祭ダサイン (dasāī N.)<sup>2</sup>。この祭 (チャド: cāḍ N.) はドゥルガ (durgā N.) などの神々が魔神に勝利したことを祝うことからドゥルガ・プジャ (pūjā N. 宗教的行為、儀式) とも言われるが、M村でも昔から代々祝ってきたとされる。ダサインはその勝利の10 (daś N.) 日目を祝うものだとされ、学校や役所は長期の休暇になるが、M村とその周辺の人びとはそのうちの最後の4日間を祝う。

9月になり、ダサインが近づいてくると、共同購入用のスイギュウをどこから入手するか、村の男たちは相談を始める。「あの家には丁度良い大きさのスイギュウがいる、あれなら何ダルニ (dhārñī N. 1ダルニは約2.5kg) になる」とか、「あちらのスイギュウはもう歳をとって不味そうだが、こちらのスイギュウは太っていて美味しそうだ」、といった具合である。この村では、スイギュウはかつて飼われていたこともあったそうだが、飼うたびに邪視 (chet P. cf. ched お化け N.)<sup>3</sup>で死んでしまったために、もう何年も飼われていない。そのため、近隣の村か、小さなバザールの農家から購入されている。

目星をつけたスイギュウでよいだろう、ということになると、相談した男性たちはスイギュウの持ち主と交渉する。それが成立すると先に手付け金を払い、後で肉の購入者を募って集金する。家族が多かったり、金銭的に余裕があり肉が沢山食べたい人は2, 3口購入するし、家族が少なかったり金銭的に余裕がない家庭は半口だけ買うこともできる。

ダサインの日が来ると、スイギュウを引き取りに行く。手綱を持ちスイギュウを引くのは2, 3人だが、その他にも村の男性が20人前後ついて行く。スイギュウは大抵は大人しく引かれていくが、急に逃げようとすることもある。そのようなときには、皆で追いかけることになる。

スイギュウは、村に到着すると、解体する場所のほど近くに繋いでおかれる。そして、供犠の日を迎えると、力自慢の男が振るう山刀でスイギュウの首は落とされ、解体される。肉は購入者の申し込み口数に応じて分けられる。スイギュウの血や内臓の一部は解体作業と平行して調理され、スイギュウを引いてきた男たち全員に分けられて、その場でハン (どぶろく) のつまみにされる。

その後肉はそれぞれの家庭で炒め煮にされ、バナナの葉で作られた皿の上でコメのアム (ご飯) とともに食される。残った肉は細長く切られ、囲炉裏の上につるして燻製にされる。

つぎに、肉のご馳走を食べた翌日のことを書いた筆者の日記を見てみよう。

まだ外が真っ暗な4時頃ヒラ氏に起こされた。「今日はダサインだ。さあ、行こう」。こう言われ、寝ぼけ眼をこすりながら、何があるのかと彼について行く。行き先は隣に暮らすヒラ氏の父系の叔父、ゴンデ氏の家だった。なかに入ると、すぐに炙ったスイギュウの肉と自家製のロクシ（蒸留酒）が出された。「今日はダサインだから恥ずかしがることはないから」とゴンデ氏にもヒラ氏にも言われる。肉を食べ、ロクシを飲み終わると、ヒラ氏はゴンデ氏や家族と言葉を交わすこともなくすぐに立ち上がり、私に「さあ、行くぞ」と言う。そして、一軒、また一軒と村の家々を飲んで食べて廻っていった。ヒラ氏は、今日は村のどの家に行っても、こうしてご馳走してもらえるのだと言う。実際に私とヒラ氏だけでなく、多くの男たちが家々を飲み歩いていた。女たちが近所の家でロクシを飲んでいる姿も見える。そうして飲み歩いているうちに徐々に私の意識は薄れていき、ふと気がつく时下宿先であるヒラ氏の家で寝ていた。

朝日が昇り、周囲も明るくなったので、重い頭を抱えながら村の様子を見に家を出る。何人もの男たちが、道や家の縁側で酔いつぶれて寝ていた。私と一緒に飲み始めたヒラ氏は、目を真っ赤にしながらも、まだ近所でハン（どぶろく）を飲んでいていた。

このように、例年ダサインではスイギュウが供犠され、肉とロクシ、ハンが無礼講で振る舞われる。ダサイン以外にもネパールで広く祝われるチャイト・ダサイン (cait dasaī N. 3月中旬から4月中旬の祭) やマージ・サン克蘭ティ (māgh saṅkrānti N. マージ月の一日、1月中旬) などの日には、スイギュウが供犠される。その他に、ファグン月 (phāgun N. 2月中旬から3月中旬) の満月にブタを供犠するのを見たことがある<sup>4</sup>。M村やその周辺での儀礼や祭では、こうした供犠が頻繁におこなわれ、その都度肉が食べられるが、ダサインのとき以外は無礼講でスイギュウやブタの肉とロクシが誰にでも振る舞われる、ということはない。

ダサインとその他の祭とのあいだには、肉の消費の仕方にそのような違いがあるものの、祭の当日から翌日くらいまで、肉を食べる機会を村人たちに提供していることに違いはない。だが、そうした祭を何度か経験するうちに、祭から何日か経っても肉を食べ続け、あるいは肉があるからと言って筆者を食事に招待してくれる家があることに気がついた。そして、そのような家で見られる肉の多くがブタ肉やその燻製であることに疑問を感じるようになった。祭を祝うために村人が共同で購入したスイギュウの肉ではなかったのである。そういった人たちの話を聴いてみると、実はそうしたブタ肉は婚出した女性が実家に持ってきたものであり、あるいは男性が母方のオジ (mama C. māmā N.) の家に贈ったものだということがわかった。

### 3-2. 肉と結婚

1996年、1月15日は、マージ・サン克蘭ティという祭の日だった。他の村から

買ってこられたスイギュウが解体され、人びとは朝からスイギュウの肉を食べ、ロクシ（蒸留酒）を飲んでいた。

当時の53あったM村の家族のうち、歩いて30分ほどで廻れるおよそ45家族で、肉をどこから手に入れたのか尋ねてみた。すると、13家族の肉が他の家族から贈られたものだった。そのうち9家族の肉は、婚出した女性から実家の親や兄弟に贈られたもので、残りの4家族では、女性が父方のオジに贈ったものだった。人びとはこのように婚出した女性から見た父方のオジの家に対しても、肉やロクシを贈るときには実家（māitī N.）と表現するので、すべてのケースが「実家に贈られたもの」ということになる。

肉を贈られた男性のうちのひとは、肉の一部をさらに自分の母の実家（母方のオジ）に贈っていた。肉と一緒にロクシも添えていた。

こうした話を何度か聴くにつれ、わかってきたのは、肉やロクシのやりとりが普段でもおこなわれ、ダサインなどの祭のときには特に盛んにやりとりされるということ、そして、やりとりのうちのいくつかは、結婚のプロセスの一部だということである。上の13家族のうち、1家族の例は、そのような結婚の一部と見なされる贈与、つまり婚資として肉とロクシが贈られたものであった。

筆者は、こうした婚資が贈られる場に居合わせる機会を何度も得ることができた。妻と側の家からも妻受側の家からも食事の招待を受けることが多かったからである。そのようなときには「明日、結婚式（bibāha N.）があるから肉を食べにおいで」と声が掛けられるのが常だった。また逆に肉を食べにくるよう招待され、行ってみたら結婚式だったということもあった。どちらにしても、それほど「肉を食べる」ということと「結婚」は結びつけて語られることが多い。「娘が嫁に行ったら肉とロクシを担いで帰って来るのが楽しみだ」と言って憚らない男性もいる。

### 3-3. 結婚の条件

少女は12, 3歳ほどになると、もうまわりから「夫のところに行ったほうが良い」と、からかわれるようになる（夫方居住が当然視されている）。だが、実際その年頃の少年や少女の親にもう結婚できるかと訊いてみると、大抵「まだ、若すぎる」という答えが返ってくる。男子の場合は「ウシを使って畑を犁くことができるようになったら」、女子の場合は「十分に身体が成長したら」結婚を考えるとM村の親たちは言う。

それでも、12, 3歳ほどの年齢で実際に結婚した若い夫婦もいた。夫はまだ小学校に通っていた。それについて、その結婚の話をまとめたという夫の母方のオジに訊いてみた。

あの娘の母親が亡くなったので、あの少年の親が（結婚させて）うちで育てると言って引き取ったんですよ。ああいう風に親がいなくなってしまうときには、まだ小さいうちに結婚することもあります。

このように12, 3歳くらいでの結婚は例外的なものとして捉えられているが15, 6

歳を過ぎた頃から結婚がおこなわれるようになり、22, 3歳くらいまでにほとんどの若者が結婚する。ただし、25歳を過ぎても「本人が嫌がっているから」という理由から独身でいる女性もいて、特定の年齢の範囲内に結婚しなくてはならない、ということではない。

筆者はヒラ氏の長女ドゥムが15歳になりかけた頃、近隣の村に暮らす少年との結婚をその父親から申し込まれたのを目の当たりにしたことがある。結局、その申し込みは「まだ小さすぎる」とか「人手が必要だから（ヤギの放牧がこのくらいの年齢の少女の仕事になっている）」と言われ、やんわりと断られていたが、これからまたいつ申し込みが来てもおかしくないと言われ、ドゥムの母親スンさんは言っていた。

この結婚の申し込みをしてきた男性の息子、つまり花婿候補の少年とドゥムとはどのような親族関係にあたるのか、スンさんに訊いてみた。少年から見てドゥムは母方のオジの娘 (māmā ko chorī N.) にあたるから、結婚相手の親族関係としては良い、ということだった。結婚相手としてどのような親族関係が理想的か訊くと、男性 (ego) の母親の兄弟の娘 (母方交叉イトコ) との結婚が望ましいと語る人がほとんどである<sup>5</sup>。この求婚では、ヒラ氏は花婿候補の母親の実兄ではないが、その母親の父系の系譜を辿ったとき、ヒラ氏は母親と同じ世代に属するため、親族名称を拡大的に使用して兄と呼ばれていた。その結果、子供同士は結婚に好ましい親族関係にあるとされていたわけだが、このような親族名称の拡大利用により、母方交叉イトコ婚が緩やかなかたちでおこなわれている。

これとは逆に父方交叉イトコ婚は、タブーとされる。村によっては、父系の系譜が辿れる限り結婚は許されないとされる。また、マクワンプール郡など東部のプラジャの人びとのなかにはクランを持ち、クラン内婚が禁忌となっている例もある<sup>6</sup>。

M村では、結婚の相手同士は父系の系譜を辿り5世代以上離れていなければならない、とされる。系譜的な距離がそれだけ確保されていれば結婚は許される。ただし、父系で5世代以上離れている者同士でも、結婚は許されない、あるいは考えもつかない、と言われる相手がいる。それは、婚資の調達・分配を共同している（結婚ごとに共同の枠組みは変わりうる）家族のメンバーであり、しばしばお互いをダジュバイ (dājyubhāi N. 同腹の兄弟) と呼び合う関係にある人である。一般には婚資の調達、分配は、父系に4, 5世代遡ると繋がる家族で共同しているのだが、近所にそうした親族がなかったり、少なかったりする場合には、系譜上でもっと離れた関係の家族同士で協力し婚資を調達・分配し合うことがある。また、逆に系譜的には近い実の兄弟のあいだでも家が離れていると共同しないこともある。このようなネットワーク的な共同関係にある家族の間柄では、系譜上の距離から見れば結婚が許される人もいるはずなのだが、「とんでもないこと」とされ、実際にその禁忌を破る例も聞いたことはない。

その一方で、結婚の相手とは5世代以上離れていなくてもいいという禁を破り、4世代しか離れていない男女が駆け落ちをする、ということがあった。それは、M村の人びとにより問題視されたが、結局この夫婦は、村人にシコクピエのアム (ご飯) を振る舞い、罰金を支払うことで、その結婚を認められた。懲罰は伴っているが、決して許されなかったり、社会の成員権を失ったりするような事態には陥っていない。この男女は系譜的には近い間柄だが、婚資の調達・分配を共同する関係にはなかった。

このことから、結婚の禁忌のうらには、系譜上の問題よりも、交換という行為主体の枠組みを壊すことへの嫌悪感がより強く働いている、つまり系譜よりも交換の枠組みが重視されていると言えるかもしれない。

以上のような条件を満たす相手を見つけて、伺いを立て続け、もし色よい返事を受け取ることができたら、少年の親は肉やロクシ（蒸留酒）を持って、正式な結婚の申し込みソダニポン（sodhani pon P.）に行くことになり、その後何年も続く結婚のプロセスが開始する。

結婚の申し込みが終わると、つぎに花嫁は実家から夫のもとに連れていかれることになる。ここから先は、M村の新婚夫婦の例を見ていく。

### 3-4. 妻を娶る

1997年12月8日。花婿であるサルパネ君の家では夜明け前からニワトリ（150Rs.相当だと言われる）が潰され、調理された。これから新しい嫁を迎えに行く親族が彼の家に集まり、ニワトリの炒め煮を肴に皆でハン（どぶろく）を飲む。日が昇り、周囲が明るくなりはじめた6時半に出発。サルパネ君、父のゴンデ氏、サルパネ君の兄嫁、父方の平行イトコが3人、伯父の妻、ゴンデ氏の叔父の孫（サルパネ君と兄弟と呼び合う間柄）に、筆者が同行した。

今日は「道も悪いし相手も気にしないから朝行く」のだと父親のゴンデ氏は言う。他の嫁入りのとき、サルパネ君の親族の男性が言っていたのを思い出す。「人によっては、花嫁を迎えに行くのは夜でなくてはならないんです。花嫁を連れて行くのを知ると母親が悲しむから、寝ているあいだに連れて行ってしまいます」。それを聞き「昔はそんな風に女性をさらって結婚していました」と続ける人もいた<sup>7</sup>。すべての結婚でそうされているわけではないが、夜のうちに花嫁の家に行き、夜明け前に出発するのが一般的と考えられているようである。

花婿のイトコが相手の家にビール瓶15本分=150Rs.分のロクシ（蒸留酒）を背負って行く。山道を降り、川を渡ってから再び山を登って行くと、やがて結婚相手の家に到着する。花婿の父と花嫁の父がそれぞれ胸の前で手を合わせ、なにやら言葉を交わすが、猫なで声（人びとは「小さな声（yungo baka P.）」と表現）で話していて、良く聞き取れない。

挨拶が一通り終わると、一同家のなかに通され、土間の床に敷かれた藁の敷物（グンドリ gundri N.）に腰を下ろす。家の家長や親族がハンを盛んに勧める。ほとんどの人は、黙って注いでもらっているが、数人はシャワ、シャワ（syawa P. 結構です）と遠慮しつつ、ハンを飲むアルミニウムの容器（マナ mānā N.）を手で塞ぐ。だが、接待する側は、笑顔を絶やすことなく手の隙間からハンを注ぎ込む。

しばらくすると、今度は鶏肉の炒め煮が、バナナの葉で作られた容器に入れられて振る舞われた。その肉をつまみにハンを飲む人もいたが、全く手をつけないまま、近くにきた子供にあげてしまう人もいた。その後、アム（ご飯）がアルミニウムの平皿（タール thāl N.）に出されるが、誰も手をつけない。家の人々が、花婿の父親や親族に笑顔で何か話しかける。それには、皆「小さな声」で返事する。

その「小さな声」について訊いてみる。すると「こうしてロー・コ・マンタ（lo ko

manta P.: 自分の人) になると愛情が湧いてくるので、小さな声で話すのです」との答え。そんな柔らかな口調での言葉のやりとりが続くうちに、しばらく経つとアムは下げられた。

婿の兄嫁が立ち上がる。他の人たちは、家の外や部屋の端へと移動する。兄嫁は持ってきた袋からマスタードオイルを出し、花嫁を呼ぶ。花嫁ははにかんだ様子で、うつむきながら、兄嫁の前に腰掛ける。兄嫁はオイルを花嫁の髪に揉み込み櫛で丁寧に梳きあげ、持ってきた髪留めやリボンをつける。髪の支度が終わると、花嫁にサリーを着せる<sup>8</sup>。

すっかり、きれいに身支度ができると花婿と花嫁は座ったまま向かい合う。2人とも恥ずかしがり、うつむいたまま顔を上げようとしない。まわりの親族たちが2人の手を取り、まず花婿の小指の先にシンドウル (sindūr N.) という赤い粉を軽くつける。そして、それを花嫁の額(髪の生え際の真んなかあたり)に付ける。花嫁も同様に花婿の額にシンドウルを付けると、「これで夫婦になった」という声が上がった。すると皆、もう用は済んだとばかりに家の外に出た。花婿の父ゴンデ氏は晴れやかな表情で両手を顔の前に上げ、「終わった(シャワ ヘン shawa hen P.)」と言った。

花嫁は迎えに来た人たちとともに花婿の家に向けて出発する。花婿に同行の男たちは、恥ずかしくて、出してもらったアムを食べられなかったとしきりに言う。

帰り道には、ところどころ、赤いきれいな布やショールが置かれている。それをめくってみると、マリーゴールドの花といっしょに水差しや瓶が置いてある。なかの液体を舐めてみるとロクシだった。

花婿の父親や親族たちは、容器に口を付けないようにロクシを一口ずつ味見し、担いできたツボに残りのロクシを入れる。花嫁の家の近所に2, 3カ所、花婿の村の入り口にやはり2, 3カ所こうしたロクシやタバコなどがおかれている。父親はそれらに対するお礼としてお金をその場に置いていく。お金は立ち去ったあとすぐに、ロクシを置いた人が取りに来るのだと親族のひとりが教えてくれた。

一行が家に到着する。家の戸口の下から高さ30cmほどまで、糸を何重にも横に渡し、そこに花やリボン、葉が飾り付けられている。花嫁はそれをまたいで家に入った<sup>9</sup>。

これで嫁入りは済んだが、その場に残った親族たちはハンやロクシを飲みつづける。近所の人たちもそこにやってきて、宴に加わった。歌をうたい、あるいは踊り、宴会は遅くまでつづいた。

それから5日目の朝、サルパネ君と新妻ふたりが妻の実家へ戻る。2人はロクシ1ツボとヤギの肉を携えて出掛けた。

「ユクドゥン・ラジャ (yukduṅ raja P. 物語の主人公 cf. rājā N. 王) のように5日経ったら、実家に肉とロクシを水瓶に1杯持って行かなくてはなりません。そうしないで実家で寝ると、娘か実家の親は死んでしまいます。これを持っていかない状況では、娘は死人と同じですよ」。サルパネ君の父親、ゴンデ氏はこう語る。

近所に暮らす30代の女性は、それについてこう語る。

(嫁いできてから) 雄鶏 1羽と 1ツボのロクシを払わないと、嫁は実家で寝ることができないんです。寝ると病気 (dokh N.) になって死んでし

もうから。どうして？先祖がそうしてきたからですよ。どんな霊がつくのか？それは、わかりません。皆そうしてきたし、きっと普通の病気で死んでしまうのだと思います。

この新しい夫婦が初めて実家に戻るとき、あいにく筆者は同行できなかつたが、後日、同じ村の青年エカイ君が妻のギータさんの実家に、父方のイトコのハルキャ君と一緒にいくところに出くわした。

3人はヤギ肉と水瓶一杯のロクシを背負い、ギータさんの実家に向かうところだった。ギータさんの父、ジャンガ氏宅に着くと、ジャンガ氏のほかに、ギータさんの2人の兄のうちのひとり、ガイシン君と母方のオジ、クリシュナ氏もそこで待っていた。3人にはヤギ肉とトリ肉、ロクシが振る舞われた。そろそろ帰ろうということになるとエカイ君は出されたヤギ肉を家で待つ母親のために持って帰ろうと袋に詰めた。ハルキャ君は肉に手をつけないまま、近くにいたジャンガ氏の子にあげた。

このような女性が嫁入りしたあと実家に贈られる肉とロクシに対しては、カリポン (khali pon P.) あるいはカリヤポン (khaliya pon P.) と呼ばれていた。だが、そうではなく、それはリヤム・チョウサ (lyam chəwsa P. cf. lyam C. 道, chəw?- C. 太った) またはリヤム・サルケ (lyam sarke P. cf. sarkanu 発展させる N.) と言うのだと主張する人もいた。カリ (khālī N.) は空 (から) を言い、ポンは5 (po.ŋa C.) の語幹やポン (pon C. 地虫, 毒のある) にも通じる音である。もともとカリポンは嫁入り後の空白の5日間を指し、そこから、人によってはその5日後の贈答 (リヤム・チョウサ) に対してもカリポンと言うようになってきているのかもしれない。ポンの意味ははっきりわかっていないが、いずれにしても、この贈与をおこなうことによって、結婚はつぎのプロセスへと進んでいくことになる。

実家への肉とロクシの贈答を済ませたサルパネ君夫妻は、「子供が生まれるまでのしばらくのあいだ、ときどき2人で妻の実家に働きに行かなくてはなりません」(ゴンデ氏)。この新婚夫婦は、とりあえず2日間、シコクビエの取り入れを手伝い、そののちに帰ってきた。

近所のナト君夫婦も妻の実家で農業の共同作業があるとき手伝いに出掛けていた。「子供ができるまで、実家とこちらと平等に仕事をしなくてはならないんです」とナト君は言う。

このように結婚後の妻の実家への手伝いの延長から、数年、あるいは生涯妻の実家で暮らす男性もいる。こうした人たちは、ガル・ジュワイン (ghar juwāī N. 家の婿) と呼ばれる。村内婚で、ガル・ジュワインになっている人は2人いる。村外婚で村内に入ってきているガル・ジュワインは1人、村外に出て行きガル・ジュワインになっている人は4人確認できた。

嫁入りからひと月ほど経ち、約束していた日にサルパネ君の新妻の実家の人たちが婚資のブタ肉を受け取りに来た。これは結婚のプロセスのひとつで、コジ (khoji P. cf. khojī N. 希求) と呼ばれる。実家の人たちは、肉とロクシでもてなされ、その後ブタとロクシがサルパネ夫妻2人によって実家に届けられた。サルパネ君は後日、妻の実家からの返礼として持たされたブタ肉とコメを担いで帰ってきた。そして、ロクシの一部を提供してくれた父系のオジたちにその肉とコメを配った。

エカイ夫妻のコジについて、同行したハルキヤ君はギータさんの父ジャンガ氏にこう持ちかけていた。「もし、あなたたちがコジの肉を親族で分けるのだったら、私たちもコジのために父系の親族皆でロクシを水瓶一杯ずつ持ち寄ることにします。バナナも用意します。そうしないのなら、エカイ君の家からブタ2頭とロクシを水瓶1杯贈るだけで済ませます」。その後、コジの肉はジャンガ氏の親族で分けられることになり、25日後にハルキヤ君をはじめとするエカイ君の親族5軒以上の家からロクシが持ち寄られた。肉とロクシを受け取ったジャンガ氏は、その肉とロクシを親族のあいだで分配し、それを受け取った親族の家からは、返礼としてのコメがロクシと同じ量ギータさんに贈られた。ギータさんは後日それを担いで、嫁ぎ先のエカイ君の家に行き、ロクシやバナナを提供してくれた親族に分配した。

このようなコジのあとには、夫側の親族が妻の実家に挨拶に行くマイティ・チナウネ (maiti cinaune P. cf. maitī N. 実家, cināunu N. 紹介する)、ダサインの最終日にブタ肉を贈るティカ (印)、そして別名リッティ・チルネ (riticirne P. cf. rīti N. 方法やしきたり, cirnu N. 2つに割る) とも言われるチャングラ (caṅra P.) が必要だと言われる。

マイティ・チナウネは、妻の実家がコメのアムと肉 (何の肉でもよい) を用意して、夫側の親族を迎えることである。

ティカは、ティン・ティカ (cf. tīn N. 数字の3) と言われることもあり、ブタを3頭贈るから、ティカを3回つけるから (最初のティカから3回目のティカまでをジェティ (jeṭhī N. 長女)、マイリ (māhilī N. 次女)、カンチ (kānchī N. 末娘) と3人姉妹のように呼ぶ) と説明する人もいる。しかし、ティカで贈られるブタは1頭だとする人もおり、状況により贈与の回数や婚資のブタの頭数が変更されるのかもしれない。ブタのほかに、ロクシ、バナナが贈られると言う。

最後のチャングラに関しては、筆者が訊いた人の誰もがブタを2頭、妻の実家に贈らなくてはならないと言う。そして「ブタが贈られると妻の実家では、夫婦の額に牛乳に浸したコメのティカをつけ、ザルに2、300Rs.入れます。親族もそこに3、40Rs. 出し合って、現金が乗せられたザルを新婦に渡します。現金は総額2、3000Rs.になることもありますよ。新婦のそばにいる3、4歳の少女にも20Rs.くらいのお金をあげます。(渡された) 現金は妻の個人の財産ペワ (pewa P., pewā N. 既婚女性の財産) になるので夫は勝手に使えません。夫の家族はリッティ・チルネのためだと言って、25Rs.妻の実家に渡すことになっています」。

これで結婚は完了するが、多くの婚資が必要とされるため、人によっては婚資の用意がなかなかできず、その支払いに10年以上かかる場合もある。

以上のような結婚のプロセスがつかずく、ということは当然起きる。親が子供の結婚相手を決めていたところで、その相手と結婚したくなければ、嫌だと言って子供が拒否しつづけることも許されないわけではない。さらに、それ以外の手として、他の人と「逃げる」ということがある。

### 3-5. 2人で逃げる (駆け落ち)

そのとき私は 18 歳、彼女は 14 歳でした。彼女には隣村の青年が、結



婚したいと彼女の両親にすでに申し込んでいたのですが、彼女はその人を好きになれず、ずっと私を好きだったので、あなたと結婚したいと言ってきたのです。そして私も、その申し出を受け入れたのです<sup>10</sup>。

ヤギの放牧をしている最中に2人で相談し、6月のある日に駆け落ちする約束をしました。昼間に逃げるのは、怖かったので、夜9時になってから逃げました。昼間は、彼女の両親の目があるので怖かったのです。村のなかで誰かに遭うのが嫌だったので、他のところへ彼女を連れていきました。

それからずっと逃げて行き、夜の12時に隣村の姉の家に着きました。夜寒かったので、姉と3人で火に当たりながら過ごしているうちに、外が白んできました。「それでは、姉さん、私たちはバザールへ行きます」と告げると、姉は「お腹を空かせて、どうやって行くんだい。アム（ご飯）を食べてからにきなさい」と言ってくれました。そして姉の炊いてくれたアムを食べ、12時頃になってから歩き始めました。結局、義兄、姉も一緒についてきてくれることになり、私そして妻の4人で出発しました。しばらく歩き川に着くと、義兄は振り返り「ここの土地の道は、こんな感じだよ。大体分かっただろう。また来るときには、道を忘れないようにね」と言い、道を教えてくれました。

バザールには夕方の6時に着きました。そこで、服や腰巻きを買い、夜の7時にそこを出ました。それから東にある別のバザールへ行き、買ったものを詰める袋を買い、お腹が空いたのでタルカリ (tarkārī N. 香辛料の入った野菜の炒め煮、野菜のカレー) を買って食べました。さらに歩くとそのうちに村人がよく行き来する別のバザールに近づいたので、妻の両親に遭うのではと不安になり、また、道で寝るわけにもいかないので、そのバザールからほど近いタルーの村へと行きました。そこには、義兄のミート (mīt N. 儀礼的兄弟関係を結んだ人、年に数回果物や竹カゴを持っていき、コメとそれを物々交換している相手) がいるのです<sup>11</sup>。

家に着くと、義兄はミートにタルー語で挨拶しました。すると「なんでこんな夜遅くになってしまったの」とミートのお母さんに言われてしまいました。事情を説明しましたが、「もうご飯は食べ終わってしまった」ということでした。義兄は「お腹空いていないから、大丈夫です」と言っていました。結局ご飯を炊いてもらい、ようやく食事を摂ることができました。そしてその家で寝かせてもらい、夜が明けるのと同時にミートに連れられ、私たち夫婦は姉夫婦とともに出掛けました。

朝御飯を食べていなかったもので、しばらく行くうちに、とてもお腹が空いてきました。「まだこの先長いから、近くの村に嫁いだ姉の家に行こう」とのミートの提案に賛成して、そちらに向かって行きました。やがて、(多少店がある) 学校のそばに着いたので、そこで、タルカリやチウラ (ciurā N. 干し飯、粉を茹でるか水に浸したのち煎り搗いて粉がらを取り除いた食べ物)、黒砂糖を買い、また進んで行きました。でもその先は、道が石だらけでとても歩き難く、大変でした。

そうこうするうちに、ミートのお姉さんの家に着きました。お姉さんの夫からどこの人かと訊かれましたが、義兄のミートが私たちを紹介してくれました。ミートのお姉さん夫婦は「随分、おなかが空いたでしょう。ご飯を食べなくてははいけませんよ」と言い、ご飯とどぶろくをご馳走してくれました。しばらくその村でのんびりしていましたが、道で偶然、私のメイ（父系の）に会ってしまいました。そこにいるとまた誰かに会うのでないかと思い、怖くなったので、そこを出て最初に訪れた姉の家へと戻りました。

夕方6時頃に着くと、そこでは私の父が待っていました。様子を窺いに来たのです。「村では話がまとまっていない。おまえたちは、どうするつもりだ」と父は私に訊いてきたので、「怖いから4,5日してから家に戻る」と私は答えました。でも父は「いや、私はおまえたちを連れて帰る」と、それを許してくれません。姉が「2,3日ここにいてもいいじゃないの。私が送っていくから」と言ってくれましたが、父は「一緒に連れて帰らないと、村にいる（嫁の）両親が怒ってしまうから、連れて行かなくてはならないんだ」と譲りません。結局、私たち2人は、父と一緒に朝早く出発しました。

私たちの村がある山の麓に着いたところで、村のある女性（20代）に会いました。彼女に「村では、あなたたちを見つけたら殺すって言っているわよ」と脅されたので、私は「それなら、裏道を隠れて行こう」と提案しました。父は、「そういうところのほうが逆に殺されやすいんだ」と言い反対します。私は、それもそうかもしれないと考えをあらため、父の後ろについて、いつもの道を歩いて行きました。

そして、人目につかないよう妻の家に入ると、父はすぐにこう言いました。「あなたの娘を連れてきました。息子もカルマ (karma N. 業績, 運命) で見ればあなたの婿にあたります。どうか怒らないでやって下さい」。舅はそれに対し「2人ともまだ子供なのに、どうやって結婚するんだ。姉が嫁にくれと言っていたのに、私は恥をかいたよ」と苦言を呈しました。それでも、やがて「娘をやるつもりはなかったけれど、もうこうして逃げてしまったのだから、仕方がない。賛成するよ」と言ってくれました。それで、話は終わりました。

その後、2人の家は結婚に伴う贈答を開始し、その結婚について村人から特別な非難は聞かれなくなった<sup>12</sup>。

この駆け落ちの例からは、実家から女性を妻としてであっても、一方的に略奪することが、「死」の制裁を予感させるということ、あるいは、そのような者は殺されてもおかしくない、という言説が存在することがわかる。そして娘が実家に帰され、挨拶し、やがて贈与をおこなっていけば許され、親が決めた結婚と同等な結婚として認められることも確認できる。この場合でも、女性が夫のところに移ったあとの最初の挨拶とその後の贈答が非常に重要になっている。

ビスタは、上の例のような駆け落ち婚と、M村でも昔は多かったとされる、娘さら

い婚のプロセスについて、こう述べている。

妻にする女を連れてきたら、男は女に衣類と装身具を贈り、友だちを何人か招いて酒と食物を出してもてなし、それですべてが円満におさまる。選んだ娘が喜んで駈落ちしてくれない場合は、男は友だちを加勢に頼んで、目指す娘を祭や集会から、あるいは畑で働いているところを、力づくでさらってくる。

捕らえた娘が最後まで結婚を拒否したときは家へ帰される。いずれにしても駈落ちや娘さらいで結婚した夫婦は、あらためて、酒1ツボと22ルピーを持って、妻の両親のところへあいさつに行かねばならない。それまで彼らはちゃんと結婚したことにならず、公認もされない。このあいさつは夫婦の都合によっていつでもよいが、これがすまないと、妻の両親や兄弟は新家庭に関する事柄で必要な役割を果たしてやることができない（ピスタ 1982 (1967:102) :193-4)。

ピスタの調査地の例と、M村の例を「チェパン」や「プラジャ」という民族名に頼りながら、単純に結びつけることはできないが、ピスタが確認した例でも、このように女性を略奪したあとの贈答が結婚の成立にとって重要な問題であることは看過できない。

このような女性の一方的な略奪（切断）という暴力とその後続く肉やコメ、ロクシの贈答関係（相互の「切断＝接続」）について、村人たちの思考にひとつの枠組みを与えていると思われるのが、上記の嫁入り5日後におこなう「カリポン」の説明にも出てきた「ユクドゥン・ラジャ」の物語<sup>13</sup>である。

### 3-6. ユクドゥン・ラジャ

昔、リャ克蘭 (ryakran P.) という男とルクティ (rukti P.) という女がいて、2人は結婚した。(結婚して?) 5日後に、妻は子供を生んで、その子にバリロ (bariro P.) という名をつけた。その子が育ったある日、両親は焼畑を伐採した。大きな焼畑を作って、そこにオカボ、キビ、ヒエを蒔いた。成長したバリロは、サル (koh P. マカカザル) に食べられないよう、ヒエを見張りにいった。そのとき、一匹のユク (yuk P. ハヌマーンラングール cf. yuk C. サル) がやって来た。とても大きなユクだったが、中身は人間のようにそれがユクの姿をし、ユクの毛皮を纏っていたのだった。それは、実は神だったので自分本来の姿を隠してきたのだった。そのユクは、「おい、妹、一緒にサルを追い払おう」とバリロに言って、2人でサル追いをすることになった。そして、サル追いを続けて5日のうちに、ユクはバリロを自分の家がある山の奥深くへ連れて行き、しばらくそこにいさせた。5日経つと、ユクはバリロを連れ出し、彼女の父と母のところに先に帰した。

バリロが戻ると母親は「おまえ、こんなに長い間、どこへ行っていたん

だい」と訊いた。「私はユクに連れて行かれて、どこか急な山のなかに閉じこめられていたんです。そんな所にいたので、いつ死ぬかと怯えながら過ごしていました」と彼女は答えた。「そのユクをどうしてやろうか」と両親は怒り、「来るなら来てみろ、こちらにも考えがあるぞ」と両親はニン（毒）を用意した。

そうしているうちにユクがやって来た。「婿さん、ハン（どぶろく）を飲みに、ちょっとなかに入りなさい」と両親は呼びかけた。そして、大きな器にハンを注いだ。ニンを混ぜて。ユクはそのニンのことをあらかじめ知っていた。しかし、両親の誘いを断り、ここでハンを飲まずに済ますことはできないし、そうしなければバリロを連れていくこともできない、との考えからハンを飲み干した。

すぐにユクはハンを吐き、瀕死の状態になった。そして苦しみつつ、ユクの息は途絶えた。

バリロの両親は、そこでユクの皮を剥いでみた。するとなかから色が白く大きな人間が現れた。「何でことだ、これは人間だったんだ。ユクかと思いきや無駄に殺してしまった」。母親は泣きだした。「こんなに良い婿だったのに、殺してしまった。この人は、自分の姿を隠していたけれど本当は神様だったんだ」。バリロも泣き出した。

「このまま捨て置くわけにもいかない」と言って、亡骸を野生のバナナの葉 (syak lo P. cf. syak- C. 蘇る、生きる) でくるみ、グルスルバン・パタルバン (石? 岩山?) の上においた。その上にまたバナナの葉を被せ、下にも敷いて全部で 10 層にした。すると、マレエチャンダ・ブレエチャンダ (mare? chanda bre? chanda P.: 巨大な岩に宿る神) というユクドゥン・ラジャの母方のオジがやって来て、亡骸を持っていった。そして、アリを呼び、マングースを呼ぶと、ユクドゥン・ラジャは息を吹き返した。それを見届けるとマレエチャンダ・ブレエチャンダは、また遠くへと去っていった。

蘇ったユクドゥン・ラジャは「あの妻をまだ捨てたつもりはない。もう一度連れ戻しに行く」と言い、またバリロが暮らす村に戻ることにした。ユクリバユエという子供に「私はおまえの義理の母さんを迎えに行かなくてはならないから、留守番をしていなさい。しばらく家を空けるから」と言い、姿を消した。

ユクドゥン・ラジャは、天からやって来て、今度は雲に隠れた。そしてバリロの両親の姿を見つけると雲の上から話しかけた。「水パイプを吸うから火を下さい」。空に向かって火をつけてやると、姿は見えないまま、タバコを吸っている音だけが聞こえてきた。しばらくすると、ユクドゥン・ラジャは姿を見せることなく舅に帽子を、姑に腰巻きを届けた。そして、再びその日のうちに天高く戻っていった。

翌日、ユクドゥン・ラジャは、バリロを連れ戻しに来た。ところが、バリロにはすでに 5 人の新しい夫がいた。ユクドゥン・ラジャは、その 5 人のことをチャンカンダ・マンカンダという神に教えられ、バリロのもとへ

向かった。

その5人は芸人で、イラクサの家を造ってバリロをそこに押し込んでいた。ユクドゥン・ラジャは生きた姿を見せ、まず妻の実家を訪れた。そして、バリロはどこにいるのか尋ねた。両親は「バリロは芸人たちが連れていきました。彼らがバリロの5人の夫になったのです」と答えた。ユクドゥン・ラジャは怒り狂い、殺してやると言って山刀を手に出ていった。そして5人の芸人との戦いに向かった。芸人たちに会うと、ユクドゥン・ラジャは「おまえたちが先にかかってこい」と言った。5人が切りかかると、山刀は次々に折れていった。そして、ユクドゥン・ラジャが2回山刀をふるうと、5人は一遍に死んでしまった。

ユクドゥン・ラジャは、その後、まずバリロを自分が住んでいるところへ連れていった。それから彼女の両親の家を訪ね、大きなブタを送り、宴を催した。そして、再び天上の世界に帰っていった。ユクドゥン・ラジャとバリロは、王と王女、神と女神のようになり、また大変な金持ちになって、そののち末永く暮らしたそうだ。

この物語のなかで、ユクドゥン・ラジャはニンが入っていることがわかっているとしても、妻の実家、つまり姻戚に出されたハンを飲み、死ぬ。妻の親からの贈与に悪意や暴力が含まれていたとしても、それを受け入れないわけにはいかない。

その一方で、娘の略奪という暴力を受けた側も、それに対して暴力で応じてしまうと、神を殺すことになってしまうことを知る。それを避けるためには、寛容さが求められる。つまり、略奪が、やがて相互的な贈与、交換になるまで待たなくてはならない、ということが示唆されているように見える。

このような物語が、直接人びとの思考を支配することはないだろう。だが、実際に結婚やそれに伴う婚資のやりとりとこの物語とが接続されている限り、こうした規範を標準的、一般的なものとする主体が構成される可能性は否定できない。

### 3-7. ショーとチョオバン

こうした交換が成り立たないのは、どのような場合だろうか。女性の略奪が交換に変わることで結婚が始まり、その結婚によって交換が盛んになるのだとしたら、女性が家族のもとから連れ去られ、そのまま何も音沙汰がなくなった場合がそのような交換の外部だと言えるだろう。それは「人さらい」や「誘拐」に遇ったときということになる。

では、具体的にどのような状況で「人さらい」や「誘拐」が起きるのか。村内で人がさらわれたという話は「昔娘さらい婚があった」ということ以外に聞いたことはない。だが、若い娘が村の外に出掛けるときには、人さらいに注意しなくてはならない、と言われることがある。特にマージ・サンクランティの祭の日に、街の近くの川に沐浴に行ったり、市を見に行ったりすると「誘拐されてボンベイ (bombay) に連れて行かれ、売られてしまうから気をつけろ」とよく言われる。

では、誰に気をつけるべきなのか。それは、ショー (syo C.) に対してである。祭

など夜通し人気のあるところに行くと、ショーに連れて行かれてしまうとよく言われる。

また、そのような現実味のある話以外に、夢にも人さらいが出てくると言う。それも、ショーと呼ばれる。Caughley (2000) の辞書でも、ショーが人さらいを意味すると記されている。

そのような人さらいであるショーは、挨拶や交換の外部であり、見知らぬ者のことでもある。

こうしたショーは自民族以外のことを広く指す言葉でもあり (Caughley 2000)、同時に少々異なったニュアンスを持つ言葉でもある。例えば、村でよくショーという言葉が使われるのは、交易相手であるタルーの人びとが訪れたときである。客人を見て「ショーが来ているよ」と家族に話すのをよく見かける。一方で、「観光客がよく来る村のタルーはショーのようだ。道を訊くのも怖い」などと言われときには、ショーは会話の前提となる親しい雰囲気の外部的存在を指しているものと考えられる。また、この例からは、タルーという異民族すべてがショーというわけではないとすることができる。つまり、異民族=ショーというわけではない。

では、ショーに対する民族の自称を何とと言うのか。冒頭から論じてきたように、この人びとは「プラジャ」を自称としている。だが、ショーに対置させて自民族を語る際には別の名称がよく使用される。それは序論でもふれた「チョオバン」である。

「チョオバン」の名称の起源にまつわる話として、M村ではこのようなものが聞かれた。

(ラーマヤナの神話から) ラーマに捨てられ、さらに逃げ続けたシータが、大地に入ったあと、バン (baŋ C. 石) の上で子供を産みました。その子はバフン (bāhun N. ブラーマン) のように読み書きができず、チョオバンになったのです。

また、Caughley (2000) は「石が割れ、チョオバンが生まれた」という神話の存在を紹介し、チョオ (cyoʔ C. 先端、頂上) とバン (baŋ C. 石、岩山) という組み合わせがその神話と上手くかみ合っていることを示唆する。だが、続けて彼はツオオ (-coʔ C. 人 cf. coʔ C. 子供、子孫) という「人」を表す語幹に、バン (bən C. 人間-西部方言) という「人間を分け隔て、分類する言葉」を付け加えたのが「チョオバン」だとするほうが、より説得力があるのではないかと論じている。

では、こうした「チョオバン」とショーの区別はどのようにおこなわれているのだろうか。それは日常的な「見知らぬ者」との出会いの場面でおこなわれている。

村人たちが、家の前庭で農作業や食事の準備をしているとき、「見知らぬ者」がそこを通るのは珍しいことではない。その人物を一見して、自分たちと容姿や服装が異なれば、はじめから「ショーが来た」ということになる。

だが、それがはっきりしないときには相手がどんな言葉を話してくるのか様子を見ることになる。カサンタ・クラ (kʰəs.ən.tə C. ネパール語, kurā N. 話, 言語) を話すのか、チョオバン・クラを話すのか。そして、カサンタ・クラで「どこから来たのか (kahã baʦa āyo N.) 」とか、チョオバン・クラで「あなたは誰の子供ですか (naŋ

su ko co? P.)」などと問いかける。こうしたやりとりの結果、もし直接的な系譜関係か姻戚関係を辿ることができれば、親族名称でその人を呼ぶようになる。そうなった場合には、その人は基本的に「チョオバン」と見なされることになる<sup>14</sup>。

なお、直接系譜関係や姻戚関係に当たらなくても、そういう関係にある人と地縁関係にある人なら、ショーであっても、直接系譜関係や姻戚関係にある人との日頃の呼び名などから親族関係を拡大的に解釈して親族名称で呼ぶことも多い。つまり、「チョオバン」でなくても個人に対して親族名称で呼び合うことが頻繁におこなわれる。

直接、「あなたはチョオバンですか」と訊くことも少なくない。だが、その場合「チョオバン」だと答え、しかもチョオバン・クラを話したとしても、はつきりした系譜関係も姻戚関係もわからなかった人物に対しては、あとでその人をショーと呼ぶことがある。

それはなぜか訊いてみる。「チョオバン・クラを話していたのにどうしてショーなのですか」。「チョオバン・クラを話していても何者かよくわからないからね」。

この場合は、言語は「チョオバン」とショーを分け隔てる基準として機能しておらず、むしろ、「チョオバン」として認めるためには直接的な系譜関係や姻戚関係が辿れるかどうか重要である、ということがわかる。

つまり、間違いなく「チョオバン」と認め合える人とは、一定の親族関係<sup>15</sup>にある者であり、そこから見て「チョオバン」は、お互いに挨拶やブタ肉、ロクシ（蒸留酒）などを互いに贈与、交換する（「接続」する）主体としてのイメージを持つ、と言うことができる。

### 3-8. 「愛」と「ンゴウラン」

だが、相互的な交換をおこなう人びとのあいだを行き交うのは、結婚に必要な挨拶や肉、ロクシ（蒸留酒）ばかりではない。また、そうした交換は結婚にまつわる儀礼的な贈与の際におこなわれるとは限らない。

肉をもたらず家畜も日常的に頻繁にやりとりされる。筆者の調べでは（以下この節の資料は1990年当時のもの）M村で飼育されていた318頭のヤギのうち、88頭が女性のペワ（財産）になっており（それ以外は家＝家族全体のものとされる）、これらは婚出した女性の実家から娘に与えられたものや逆に娘や姉妹の嫁ぎ先から母や姉妹に持って来られたもの、およびにそれらを繁殖させたものである。同様にブタも127頭のうち、27頭が女性の財産で、ニワトリもヒヨコも併せて327羽のうち、122羽が女性のペワ（財産）として飼われていた。

今日M村の人びとの主な生計活動は常畑におけるトウモロコシやシコクビエなどの栽培だが、その常畑も53家族のうち14家族が、自分の所有する土地だけでなく、他の家から借りた土地を使用していた。常畑を借りている14家族の生産のうち、借りた常畑に依存している割合は平均1/4にもなる。借りた畑の生産物は、近隣にある他の民族の村ではアディヤ（ādhiyā cf. ādhā N. 半分の）と言って収量の半分を地主に払わなくてはならないが、M村と周辺のパラジャの村ではどのような畑でも無料である<sup>16</sup>。

そうした常畑は「姻戚には貸すが、父系の親族には貸さない」と言われ、実際に貸

借のほとんどが姻戚のあいだでおこなわれていた。唯一見られた父系親族間の常畑の貸与は、「あの家の人は怠け者で何もしないで放っておくから」という例外的な位置づけがなされていた。このような常畑の貸与は比較的大きな面積の土地を所有する家族からわずかな面積の土地しか持たない家族に対しておこなわれるが、大きな面積の土地を所有している家族でも、貸与によって耕作地が不足し、他の家族から土地を借りている例が見られる。

また、常畑の貸与だけでなく、穀物などの農産物が頻繁に送られる。筆者はある女性が母方のオジの家でレンズマメをフルイにかけているのを目にしたことがあり、それについて訊いてみると「オジがこのマメをくれたんです」という答えが返ってきた。また、ある男性が頻繁に妹の家に、穀物を運んでいるのに気がつき、それについて訊くと、「妹の家族に160kgのトウモロコシやシコクビエを譲った」ということだった。その年、彼の家では穀物が不足し、約1ヶ月分の穀物をバザールで購入しなくてはならなくなった。筆者がそれを指摘すると「あげなかったら不足するようなことはなかったけれど、皆平等にならないとね」。そしてさらに「自分の手元に沢山置いておくことはできないんです」という答えが返ってきた。他にも5家族が穀物を姻戚に譲っているのが確認できた。

4, 6月の食糧が不足する季節には、女性とその子供が実家へ、あるいは逆に親が娘の嫁ぎ先に短期、長期の滞在をする様子が見られるが、これも食事の分配として見ることができる。「昔は食糧が不足すると娘は実家にイモを持っていった。そうすると穀物がもらえた」と古老は言う。その他に、低地のタルーとのヨーなどの果実と並ぶ交易品である竹カゴの材料となる竹は、「姻戚はただでもらえるが、それ以外の人には50Rs.の代金か、2日間の労働で支払わなくてはならない」のがM村とその周辺で一般的である。

こうした土地の貸与や様々な物資の贈与について訊いてみると、父から娘に貸されれば、娘への「愛 (jahsa P. 愛する)」、兄弟から姉妹へ貸されれば姉妹への「愛」によるものだと表現される。このように「愛」により人びとは相互に贈与を繰り返すのである。

では、「愛」はどこからやってくるのだろうか。「愛」が語られる関係として、姻戚が強調されている。ここから、姻戚という外部的なものに対する「もてなし」がその根本にある、と捉えることもできるかもしれない。また、「女性は稼ぐ(ウシを使って畑を犁く) ことができないから色々なものをあげるんですよ」と言う人もいる。そこから女性というジェンダーに男性中心の均等分配の論理を補完する相互扶助的な論理を重ねている、と読み取ることもできる。だが、こうした「愛」のやりとりは、必ずしも姻戚に限られているわけでも、女性間に限られているわけでもない。

姻戚になぜ「愛」を感じるのか訊いてみたことがある。そのときに返ってきた答えは「一度知ると、自分の人 (āphno mănche N.) のようになり、愛情を感じるのです」ということだった。また、筆者が知人を村に連れて行ったときに、親族関係のほかに「またこの村に戻ってくるのか。戻るのはいつか」と盛んに村人たちから訊かれ、その地に戻り、再会することが村人の愛情と関わっているのかと考えさせられたことがあった。

知り合い、何度か再会を繰り返すことで、結果的には「馴染む」ことになる。「遠



く離れた国の人も、こうしてここに馴染んだのだから、また何度も来て下さいよ」。筆者の帰国間際だけでなく、M村に滞在し3ヶ月もすると盛んにこう言われるようになった。また、「馴染んだ」人には、「ンゴウラン (ŋoulan P. 会えなくて寂しい、懐かしい) ということが語られ、その「ンゴウラン」という感覚が人びとを再会に向けて動かす原動力になっている。

40代の男性ティワレ氏は、筆者がM村に暮らすようになって半年ほど経ったある日、彼の家から徒歩30分ほどの距離にあるヒラ氏の家に泊まりに来た。彼は何か用事があったのだと筆者は思っていたのだが、何の用事もなく来たのだと言う。詳しく話を訊くと、筆者にしばらく会っていないので「ンゴウラン」になって来たのだということだった。彼は、その後何度か「ンゴウラン」と言って筆者に会いに来てくれた。

また、ある20代の既婚女性に、誰に対して「ンゴウラン」と思うか訊いてみた。

お母さん、それにお父さん、弟たち、隣村に嫁いだ妹。それからタルーのミートニ (mītinī N. 儀礼的な姉妹関係を結んだ女性 cf. mīt N.) も。ミートニとは結婚する前に儀礼をしてミート (儀礼的な兄弟関係) になったの。お父さんと竹カゴを担いでいったとき？そう、でも今は彼女も結婚して他の村に行ってしまう会えなくて「ンゴウラン」です。とても背の高い子で以前会ったときに私に3着も新しいブラウスを買ってくれた。とても「愛」してくれるの。このあいだも1ダースのブレスレットを買ってくれて、私には大きすぎて人にあげてしまったけど、本当にとっても「愛」してくれるので、私は彼女に「ンゴウラン」なんです。

タルーの人びとは、交易の際「いつも、魚や卵のおかずでもてなしてくれる」。そのような「愛」してくれる人びとと、かつて同じ家でともに暮らし、のちに嫁いでバラバラになった家族が「ンゴウラン」の対象になっていることがこうした例からわかる。姻戚間で多くやりとりされる土地や生産物なども、そのほとんどが結婚前までともに暮らした家族のあいだで貸与あるいは贈与されている。

家族は、日頃から何度も再会し、言葉や物を幾重にもやりとりする関係である。そう考えると、「愛」の根本には、出会い、再会を繰り返す、あるいは物のやりとりを繰り返すことから生じる馴染みの感覚、そのような「接続」された感覚、「包摂」感覚があるように思われる。ここから、物をやりとりするだけでなく、人同士も行き来することで、「愛」や日常感覚を構成していく、そのような主体としての自己のイメージを人びとが持っている可能性を指摘できる。

### 3-9. ラスを知る

このように「愛」という言葉を持ち出せば、様々なかたちで贈与を受け取ることができるが、それはある感情により歯止めがかけられる。その感情は「恥」である。人びとは一方的に贈与されることに対してラス (ras C. 恥ずかしがる) と言う。この

ラスは、嫁入りの際、新しい姻戚を訪れた人びとが食事を「恥ずかしくて食べられなかった」と言っていた場面を振り返ることで確認できる。

他にも普段からラスという言葉はよく聞かれる。

ある家に普段あまり交流のない親族たちが水瓶 1 杯分のロクシを持ち、12 人も来た。それを聞いたある男性は「自分はそんなに大勢で行くのはラスナン (ras nanj P. 私は恥ずかしい)。それだけの人数で行ったら、家の人はコメのアム (ご飯) やおかず、ハン (どぶろく) などのもてなしで赤字になってしまうから」と話した。

結婚式でハンを大勢で飲んでいるところに村の青年が通りかかった。青年は、ハンを飲んで行けと声を掛けられ、「ラスト チンガラ (rasto cinjala P. 私は恥知らずです)」と言いながら座ってハンを飲む。

筆者が村を歩いているときに、ある家に親戚からキュウリが沢山届けられているから、あとで貰いに行ったらよいと近所の人に教えてもらった。結局遠慮してその家に行かなかったことを話していると、近くでそれを聞いていた子供から「ジャパン (筆者の呼び名) もラスを知っているんだ」と大きな声で言われた。

また、食べ物とは関わりがないが、ラスという言葉は、このような使われ方もする。

筆者が訪問した家で、子供が泣いているのをお婆さんがしかる。「ラスを知らないのかい、お兄ちゃん。もう、笑われておしまい」。

このように、ラスという表現は、「他人たちに笑われる」と言い替えられることがある。

また別の家に筆者が訪問したときに、ある母親が子供に言う。「早く掃除して。ジャパンに笑われるよ」。

儀礼などで無礼講のときにも「他の家であまり沢山食べるとハタロム (hata lom P. 他人たち) は笑う (ni nani P.) し、ショーたちは叱る (haru nani P.) でしょう。だから、私はあまり家の外に行きたくないんです」。

このようにラスという言葉、感情は一方的な略奪を避け、相互的な交換関係を指向し、同時に、客をもてなすような主体と結びついていることが確認できる。そしてこのラスの他に、交換と深く結びついたものがある。それは、ユクドゥン・ラジャの物語にも出てきた毒、ニンである。

### 3-10. ニンとの出会い

M村に住み始めて数カ月、村人たちと挨拶以上のお喋りがようやくでき始めた頃のことだった。朝、ある青年が血相を変えて筆者の下宿先へやってきた。そして、筆者とは目も合わさずに家の人に早口でひとことふたこと何かを告げ、またどこかへ行ってしまった。彼のいつもと違う様子に、筆者は何事起きたのかと驚かされた。

早速、ヒラ氏に何があったのか訊いてみた。「近所のパンデ (シャーマン) が、ここ数日腹痛を起こしていたんだが、自分で治療儀礼をしても治らないし、薬を飲んでも良くならなくて、昨日から彼 (下宿先に来た青年) がニンを盛ったんだと言いだしたんだ。それを彼が知って、村のミーティングをやるから集まってくれ、と触れ回っているんだ」。

筆者もヒラ氏について、そのミーティングに行くことにした。学校の傍の広場につくと、もう大勢の村人が集まっていた。しばらくして、事件の当事者2人が到着すると、それぞれが自分の言い分について怒気を含みつつ大声で話し始めた。周囲にいた村人たちも、同じように事件に対する自分の考えを大声で話した。ミーティングは、話し合いというより、大勢の人が同時に話す演説大会という様相を呈したが、やがて、「もうカッサム (kasam N. 誓い) を立てよう」と誰かが言いだした。近所から子供の教科書が持って来られ、そのなかのクリシュナの絵が書かれたページが広げられた。そして、それは石に立てかけられ、前には火をつけた灯明が置かれた。

まず、疑いのかげられた青年が「私はニンを盛っていません。もしウソをついたら私は一週間以内に死ぬでしょう」と言いながら、灯明の火にそっと触れた。ついで、彼を訴えたパンデが同じことをして、その後村人たちがそれに続いた。老若男女がいたが、各家族の代表がひとりずつ集まってきているとのことだった。

下宿先へと戻る途中、近所のカジ君が筆者に愚痴のようにこぼした。「昔はこういうことが沢山あったんです。だから安心してハン (どぶろく) をもらって飲めませんでした」。下宿先へ戻ると家のお婆さんから「彼はニンを盛ったりしていないよ。だけどニンを持っている人もいるからね。あそこの家に食べに行つてはいけないよ」と言われた。

こんな忠告をされても、この時点ではニンは本当には盛られることはないとは筆者は信じていた。だが、かつてこの村で実際にニンが使われていたことが、その後わかった。

昔シャアが沢山とれたときに、チベット人の行商が 1Rs. でニンを売りに来ていた。親指の爪くらいの大きさで矢 10 本分になった。ニンを塗ったラア (矢) がシャア (シカ) に擦りさえすれば、シャアは死んでしまうんだ。ニンをつけるときにはニンに向かって色々なことを言わなくてはならない。ニンと弓矢には 5 人姉妹と 4 人兄弟のあわせて 9 人のキョウダイがいて、その全員に言葉を贈らなくてはならないんだ。シャアにラアが当たったら、ニンに他のところへ移るように言わなくてはならない。そうしないと自分たちがニンを食べることになってしまうからね。

ニンの話はその後もつぎつぎに聞くことができた。

夜になるとニンの魂は抜けだして、人びとの家のトウモロコシの魂をつれてくる。そうしてニンがトウモロコシを持ってくるので、その家のトウモロコシはなくなることはない。

金持ちになりたい人が持っているんだ。ニンは森に生えているものではなくて、ショータちが売りに来るものなんだ。彼らは罰が当たると言っ、ニンが売れたときには木の幹にどの村で何軒の家の人を買ったか書いて行く。去年もS村とK村で売れたそう。

こうして買われたニンは、夢のなかで「生け贄が食べたい」と言ってくるので、そうしたら人にニンを食べさせなくてはならない。食べさせないと家の人をニンが殺してしまう。人によっては金持ちになるようにニンに「この日に生け贄に食べさせます」と文言を唱えることもある。ニンには、人を一日で殺すジャアのヒゲのニン、数日、数ヶ月かけて殺す植物やカエル、ヘビのニンがあつて、そういうニンを食べるとお腹のなかにカエルやヘビが住み着くようになる。

治療はパンデにはできなくて「斯く斯く然々の薬草をあたえよ」という夢を見た人が、直すことができる。その薬草の名前を口にするだけでも効果があるが、他の人が同じ薬草をあげても効果はない。

私の姉もカエルのニンを盛られたことがあつて、そのときには知り合いが3回治療して治った。大便から死んだカエルが出てきたそう。

ある親戚は、妻がアム（ご飯）に毒を入れて人に食べさせようとしておいたものを知らずに食べて、死んだんだそう。家族がそう話していた。

ニンは金持ちの家にあるんだ。近くの村のタマン (tāmān N. 民族名) の家では各家庭でニンを持っているんだって祖父によく聞かされたよ。

彼の家にはニンはない。金持ちじゃないから。

この村では、皆にハン（どぶろく）やアムが振る舞われるときに怖がる必要はないよ。それでも家のなかからアムを出してくるときには怖い。

ラア・ルイ（弓矢）は、ニンの住処。自分たちにとっての家のようなもの。

筆者があるお宅で、ハンを勧められたときのこと。遠慮してその家の男性と半分ずつに分けて飲む。おかずのレンズマメも半分ずつで結構です、と遠慮すると、その人の妻は筆者が「怖がっている」と言い、「うちにはニンはないから怖がることはないよ」と付け加えた。

ニンは自分の食べ物を他人に与えるとき、そこに宿り移動していく。食べ物を与え

る側は、相手を「愛している」からあげる。だが、それが貴重なものであれば「惜しい」と思うかもしれない。一方、食べ物を与えられる側は、それに何が含まれるのか十分に知り得ないものを食べる「危険」を抱えることになる。また、同時に相手の食料を奪うという「暴力」を行使することになる。ニンは「愛」であり「惜しさ」であり、同時に「危険」であり「暴力」でもある。

ニンは、贈与と贈与のやりとりのあいだに生じるズレ、つまり交換で生じる過剰に対して想像されたものであり、それは両義的な力のイメージを伴っている。そのような過剰、捉えどころのない力のイメージは、人びとにとって外部的なものだと考えられる。ニンが「チベット人」という「異人」、外部の存在によってもたらされると言われるのは、そのことの現れかもしれない。

ここまで見てきたように、結婚の問題はラスやニンの問題に繋がりながら、特定の「プラジャ・イメージ」や「チョオバン・イメージ」のあり方を示している。それは、(女性の略奪が起点になる、という男性中心的な論理を抱えながら)相互に交換をおこなうが、だからこそ、ラスやニンと離れることができない者のイメージである。

そして、こうした交換の外部は、ショーや「チベット人」、そして人さらいのような不気味さを伴った存在として想像されている、と言えるだろう。

## 注

- 1 ビクラマーディティヤ (bikramāditya N.) 王によって導入されたとされる太陽太陰暦。
- 2 アソージ月 (asoj N. 9 月中旬から 10 月中旬) 白半月の第 1 日から 10 日目まで、さらに続けて満月の日まで祝われることもある。
- 3 人に対する邪視はジャソ (jaso P.) とされる。
- 4 ブタは村のマーブジュ (偉大な婆様) と呼ばれる気風の良さで知られるハリさんのもので、彼女の所有する 4 頭のブタのうちの 1 頭だと言う。ブタは 9 ダルニ (1 ダルニは約 2.5kg) あり、肉は 16 に分割されて、それぞれ前もって購入すると言っていた近所の人たちに 1 ダルニ 25Rs. で売られていた。
- 5 実際には「好き合って」結婚する人もいられると言われるが、カトマンドゥウや街で聞かれる「ラヴ・マリッジ (love marriage)」という言葉が、この村の具体的な結婚に対して使われるのを筆者は聞いたことがない。
- 6 ビスタ (1982 : 189-90 (1967 : 100)) は東に住むプクンタリ・チェパンはいくつもの外婚クランにわかれているが、西部のカチャレ・チェパンは、ひとつのクランしかもたないと述べている。また、Gurung (1985) は、より詳細にクランを持つ村と持たない村との比較社会研究をおこなっている。
- 7 嫁さらい婚については、本章でも引用したビスタ (1982 : 192-4 (1967 : 101-2)) の報告がある。  
また、娘さらい婚は、ブラジャの人びとに特有のものではないことには特に注意したい。ブラーマン (バフン) の例として安野 (2000 : 69-73) による西ネパールのティブネ (誘拐) の報告がある。
- 8 花嫁に贈られたのは 2,500Rs. 分のサリーや装飾品など。サリーだけで 450Rs. したと家族は言う。
- 9 家によっては、こうした糸や飾りを掛けず、ニワトリの供犠をおこない、その血を戸にかけたり、何もせずに花嫁を家に迎え入れたり、少なくとも村で統一されている様子はなかった。
- 10 ここで「そんなことないわ。お互いが言い出したのよ」と言う彼の妻の声が飛んで来た。  
家族や親族を中心に女性を捉えたときには女性の移動は、略奪と捉えられるが、この例からわかるように、嫁ぐ女性を中心に見てみると、女性が主体的に相手を選び、結婚をおこなっていることが明らかになってくる。
- 11 ブラジャの男性は、大抵 1 人以上のタルーのミートを持ち、交易に出掛けたときには、

ミートの家に宿泊する。女性でも交易によく出掛ける人は、タルーの女性のミートニ（儀礼的な姉妹関係を結んだ女性）がいる。

12 それに対して、親族関係として認められない結婚をした人は、後に罰金を支払うなどしても「許されない結婚」だとか「子孫は続かない」と本人のいないところで非難されることがあった。本人は、そういった声にも、子供も生まれ皆元気にしている、と全く意に介していない様子だった。

13 この物語を含め、雨季にしか語られない物語をウィン・ライと言う。雨季になると夕方陽が落ちてから、家々から独特のリズムに乗ったウィン・ライを語る人びとの声が聞こえてくる。

なお、このテキストは本来一晩では語り尽くせない、という長い物語をカジ君にネパール語で短くまとめて話してもらったものである。カリポン（リヤム・サルケ）の説明で出てきた妻を連れ去って5日後の実家への贈与の話は、ここでは出てこないが、これは短く省略されたためかもしれない。

M村では他にダルビ・ラジャ (darbi raja P.)、ガンガ (gaṅga P.)、ギルシャンドウ (girshandu P.)、アラセ (alase P.)、クルワオ・ラニ (klwao rani P.)、ガルダイ・バヤ (gardai baya P.)、トゥルンピン・ラニ (trunpin rani P.)、ハリ・チャンダ (hari chanda P.)、チャンパテ・ラジャ (campate raja P.)、ニピヤン・バリ (nipyan bhari P.) などのウィン・ライが語られているとされる。

また、Caughleyは『チョオバン・クラ (cyo?baṅ kura)』というマクワンプール郡で採集した物語集を印刷している。このデヴァナーナガリー文字を用いた「チョオバン」の言葉で書かれた本には、カエルとカワウソ、キツツキとサル、ハリネズミとトラとカメ、カニとシカ、野鶏、などのウィン・ライが収録されている。

14 異民族と結婚している場合には、姻戚がショーなのかどうかは判断に迷うところかもしれない。結婚したからそのまま「チョオバン」ということにはならないだろうが、ショーという表現は避けて、なるべく固有名詞や親族名称を用い、何か文化的な差異を感じ取ったときにのみショーを使う、ということになるのではないだろうか。

15 M村に日本の知人を連れて行くと、そのたびにその人が筆者のどのような親族関係にあたるのか質問された。このことも、M村の人びとが出会った人をまず親族関係から位置づけようとすることを示している。

16 Rai の調査地であるダーディン郡の村では、焼畑用に土地を借りた場合、tika（肉や酒のお礼）を年に一度所有者に渡す（1985：42-3）と言われているが、M村とその周辺ではそうした事例は確認できなかった。なお、M村の生業については橋（1991）で、詳しく論じている。